

精神薄弱児の人物画の発達について： 普通児との比較

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/23543

精神薄弱児の人物画の発達について

……… 普通児との比較

多 田 建 治 ・ 窪 田 陽 呂 子*

問 題

人物画検査法は、心理検査の一種として独自の位置を占めている。それは、最近新しく開発された多くの心理診断用の検査にみられるように、複雑な高価な器具を用いたりしないで、鉛筆と画用紙のみで検査が可能であり、また、幼児にとっては非常に難しい課題である、長時間の注意の集中といったことから免れていて、所要時間も5分程度で実施可能である。こうした検査施行の簡略さに加えて、多くの幼児は描画活動を比較的にいやがらずに喜んで行うものである。また検査者が、幼児の描いているものについて尋ねたり、会話を引出したりすると、多くの子供は、ますます好んで描画活動が続けるといった面がみられる。もともと描画活動の最初の形態である錯画（なぐり描き）の段階では、幼児は何を描くかというよりも、でたらめに、描くこと自体を楽しむのである。シャルロット・ビューラー⁽¹³⁾により、「機能的快楽」と呼ばれているこの段階は、子供が描くことを好きになる非常に大切な時期なのだが、その重要性は多くの大人、とくに母親にとって気づかれていない。この機能的快楽に、内外の種々の要因が加わって、母さんのように描きたいとか、友達のように描きたいという他人の模倣が生じてくる。また、大人の方も、子供の描いた錯画に対して、「これ、お母ちゃん?」、「これ、お月様?」などと尋ねることにより、本来無意味

であったものが、意味づけされた内容をもってくる。そうすると、こんどはその内容を目指して、お母さんを描こうという活動になってくる。

幼児は3才以降になると比較的好んで人物画を描くようになる。なぐり描きから人物画への発達にも、一応の過程があり、Kellogg⁽³⁾は、14ヶ国から集めた、2才から8才までの子供の線画、20万枚以上の資料から、なぐり描きを、20個の形式に整理し、なぐり描きから人物画への発達過程に於て、なぐり描き——円——マンダラ——太陽——顔——頭足画——人物、という順序と形式をあげている。また、小林⁽⁵⁾は人物画を採点化するに当り、グッドイナフ、桐原の採点項目を参考にしながら、臨床的に有効なように採点項目を発達的に配列化しなおして、人物画の発達のし方を詳細に分析している。なぐり描きから、完成した人物画への発達過程は、グレッツィンゲル⁽¹³⁾や、園田⁽¹⁴⁾の本の中にもみられる。

人物画検査を心理学的検査の一つとして見る場合にも、二つの方向がある。一つは、グッドイナフにより1926年に発表された、人物画知能検査法であり、他は、マッコーバーやレヴィーによる、人物画による性格の投影検査法である。ここでは、知能検査、発達検査としての人物画をとりあげるので、性格の投影検査法としての人物画の見方を省略するが、実際には、両者は、相互に深く関連していると思われる。つ

* 富山県立しらとり養護学校

まり、同じ発達段階の絵でも、性格診断的に見ればかなり異っているような場合、単に発達の段階から見て同じと見なしてよいのかどうかという問題が生じてくる。例えば、同一期間に、同一スコアだけ発達した、2人の児童の絵に於て、一方では使用された色彩が同じであるのに、他方では使用された色の数がずっと増加している場合、そこに何らかの発達の差異を考えなくてよいのか。これを単に情緒の発達とみなして、知的な発達から切り離してよいのかどうか、という問題である。

グッドイナフの方法は、DAM検査⁽⁶⁾ (Draw a Man Test)として、本邦では桐原によって標準化され、3才～9才の児童に於て、発達検査としての有効性をあげている。また、コピッツ⁽⁶⁾は、1,800人以上の児童について標準化を行い、コピッツ独自の採点法を開発し、発達項目として、期待項目、通常項目、異例項目の採点項目を各年令群、男女別にあげている。そしてこの3つの項目から人物描画得点を算出している。このコピッツの方法は、5才～12才の児童の発達検査として有効性が認められている。また、この方法は、グッドイナフのDAMと区別してHFD (Human Figure Drawing) と呼ばれる。

DAM検査と他の知能検査との相関係数は、桐原⁽⁶⁾ (1944) は、ビネ＝シモン式知能検査との間で、 $r = .760$ の高い値をあげており、小林、小野⁽⁷⁾ (1976) は、東京都内の小学校一年生、男子41名、女子42名の検査の結果から、田中ビネとの相関、.332、及び、.360、WISCの言語性との相関、.405、及び、.369をあげている。また、WISCの動作性との相関は、.649、及び、.481でこの相関は高く、DAMが本来、動作性知能レベルを測定するものとみなされていることを確認している。

絵の発達段階については、古くは、トムソリン⁽⁹⁾、最近では、ローエンフェルド、ワロンなどの多くの研究があるが、本邦で一般的な、文部省幼稚園教育指導書に示されたものをあげると、

- 1 <なぐり描き期> 1才半～2才半
無意味な線がきをする時期
- 2 <象徴期> 2才半～3才
描いてから後で意味づけをする時期
- 3 <前図式期> 3才～5才
そのものらしく描く時期 (人物画多い)
- 4 <図式期> 5才～9才
いわゆる絵になりかけた時期
- 5 <写実期> 9才～

となっている。ここで図式期の5才では、コピッツがとりあげたように、胴体に、目、鼻、口のついた頭部と、脚をもつ、誰がみても人間だとわかる、人物の全体像が期待項目として、90%以上の児童にみられる。コピッツは、全体の人間像が描ける段階以降の発達をとりあげ、それ以前の不完全な人間の段階はとりあげなかった。それに対し、グッドイナフは、3才～5才までの人物画もとりあげ、無意味な、なぐり描きから人間像へと到る、いわゆる前図式期に相当する段階を重要視した。この時期は、いわゆる頭足画が多くみられ、描画が試行錯誤をくり返しなが、非常なテンポで発達する時期であり、子供により発達の様相の差異も著しく違う時期である。それだけに、この時期の描画の発達は非常に重要であり、もっと詳細に研究する価値のあるものである。

3才ごろの人物画は、子供のもつ知的能力そのものよりも、環境的因子、つまり、絵を練習する機会の多少、親のそれへの係り方、模倣する適当な対象の有無、情緒的な問題などが深く関係しているので、この時期の人物画を点数化して、そのまま評価するのは大変危険であると、伊藤、若林は述べている。しかし、それでも、彼等の3才児を対象とした人物画の研究では、人物画の発達段階と、知的能力、情緒および社会性との間には密接な関連があると認められたと報告していて、3才児検診で行った人物描画法の、幼児の精神発達を知る上での有効性を認めている⁽¹⁸⁾。また、Vane, J. R. & Kessler, R. T. は、112人の児童に、幼稚園、小学1年、2年、

3年と1年おきに人物画の追跡資料を集めて分析した結果、幼稚園段階での人物画が、後の知的発達を充分予測出来ると述べている。また、McHugh, G.⁽¹²⁾ は、83人の幼稚園児について、入園前2週間、入園後1ヶ月、2ヶ月、3ヶ月と施行した人物画検査の結果、入園前の人物画の得点は、描画の経験とか描画の材料の有無といった、家庭での経験の影響が大きいと述べている。

対象を精神薄弱児とした場合、従来、その研究はさほど多くはない。精薄児も普通児と同様に考えてよく、精神発達がそれだけ未熟なものとして扱われている。つまり、人物画らしきものが描き始められる精神年令に達してさえいれば、普通児と同様に採点が可能であり、人物画に於ける知能指数を算出出来るのである。

松田はこれに対して、精神年令のみで考えるのではなく知能指数を考慮しながら、特殊学級児141名についての人物画検査の結果から、次のような結論を出している。すなわち、知能指数35以下では人物画らしきものを描くことは出来ない。知能指数36～45では、全然描けないものは殆んどなくなり、全体のバランスがおかしいとか省略がみられ易く、ステレオタイプな絵が多いと述べている。知能指数45～55になると人物の全体像がだいたい描けるようになり、また、年令の上昇と共に発達がかなりみられる。そして、知能指数の観点からみると、知能指数50前後を境として発達の過程に違いがみられ、低い段階では発達のテンポが遅くステレオタイプな絵になり易い。高い段階では発達のテンポも比較的速く、発達の過程もはっきりしている。そして徐々に写実的な絵へ向かうと述べている。

また木船は、養護学校と特殊学級の児童生徒165名を対象として、田中ビネと人物画を並行実施した結果、田中ビネのIQと人物画のIQの間に、.64の相関を得ている。McElwee, E.W.⁽¹¹⁾ の精神薄弱児を対象とした結果でも、.717の高い相関関係を得ているので、普通児の場合のもっと低い相関係数と比較して、人物画検査は、普通児の知能測定よりも精神薄弱児の知能測定

において、より有効性を発揮するのではないかと述べている。

松田の論文では、精薄児でも知能指数により発達過程が異るとの結論であったが、本研究では、同一精神年令段階にある、普通児と精薄児とを対象として、短期間ではあるが人物描画をくり返し行うことにより、その発達過程の違いを見ていこうと試みたものである。人物画検査は比較的簡便に行えるにもかかわらず、普通児の結果と精薄児の結果を直接比較した研究は少ない。特に、人物描画の発達に於て、もっとも複雑で混沌とした、3才～4才レベルを被験者としたことも本研究の特色である。

目 的

コピッツの方法では省略されている、なぐり描きから人物像への移行期である3才～5才の同一精神年令にあると思われる、普通児と精神薄弱児を対象として、人物画を2週間ごとに5回にわたって施行し、その発達のパターンを比較検討する。また、描画発達のパターンと、発達段階との関係、知能指数や生活年令などの関係を検討する。

方 法

1 被 験 者

普通児群：富山市内にある私立H保育園児26名（男子16名、女子10名）、C. A. 3才9ヶ月～4才7ヶ月、I. Q. 89～140（田中ビネ）

精薄児群：金沢市内にあるK養護学校小学部児童、6名（男子2名、女子4名）うち、ダウン症児、3名、脳水腫、1名、自閉傾向、2名、C. A. 6才9ヶ月～8才3ヶ月、

I. Q. は当初40～50ぐらいの見当をつけていたが、実際に田中ビネを施行した結果では、自閉傾向や、言語障害のため、テスターとのコミュニケーションが十分に機能せずに非常に低い値でできた。この段階での知能測定は不可能で測定不能とみなした方がよい。実際に測定された M. A. は、1才11ヶ月～3才3ヶ月で非常に低い値である。

2 施行日時

- 普通児群 (準) 53年10月2日
 (準) 53年10月16日
 (1) 53年10月29日 (基準)
 (2) 53年11月13日
 (3) 53年11月27日
 (4) 53年12月11日
 (5) 53年12月17日又は12月25日
- 精薄児群 (準) 53年10月5日
 (1) 53年10月18日 (基準)
 (2) 53年11月1日
 (3) 53年11月15日
 (4) 53年12月1日
 (5) 53年12月13日

凡そ、3ヶ月にわたり2週間ごとに検査を行ったが、普通児では、1, 2回に収集した絵をみると、「顔」だけ描く子供が多くみられたので、3回以降は体も描くように指示をつけ加えた。それ故、実際には、3回目を1回目の基準とし、3回目以降5回にわたる絵を分析の対象とした。

また、精薄児群でも、1回目は検査に不慣れたため、2回目以降5回にわたる絵を分析の対象とし、2回目を1回目として基準とした。

3 施行方法

対象児、各々に8つ切りの画用紙1枚と12色のクレヨン一箱を与え、「お母さん」を描くように指示を与えた。普通児群では、教室で一斉に、「みんなのお母さんを描いて下さい」と言って、自由に描かせ、時間は制限しなかった。途中机間巡視して指示をくり返したり、励ましの言葉をかけて描画を促した。なるべく子供たちの絵を描きたいという欲求が熟されるように気をつけた。精薄児群では、指示がうまく伝わるように、お母さんに関する「紙芝居」をしたり、言葉かけを多くしたりした。また、2人ずつ別室にて描かせた。

人物描画と共に、全員に田中ビネ式知能検査を合わせ行った。

結果と考察

普通児群、精薄児群ともに、絵を描くことにはすぐ応じたが、精薄児群では、「お母さん」を描くという指示が理解出来ず、人物を描ける子供でも、なかなか描いてくれないこともあった。全員画用紙に、三本の指を用いてクレヨンを持って描き、用紙からはみ出すことはなかった。意図的な色のとり出しもあまりなく、無雑作にクレヨンをとり出しているのが多かった。施行所要時間は、5～10分であった。

最初の描画の状況を全体的にみると、普通児の描画には、なぐり描きから象徴的表現のもの、頭部中心の頭足人間、胴があり衣服を着ているものまで様々であり、人物が画中にみられるのが殆んどで、頭足人間が多い。精薄児の描画にも、なぐり描きから胴のある人物画までみられたが、人物が画中にみられたのは、6人中3人であり、人間の顔らしきものが見えるのが1人、なぐり描きが2人であった。伊藤、若林⁽²⁾の述べるように、両群に於て描画に個人差があるのは、知能だけでなく、描画活動の機会のあるなしや、子供をとりまく様々な条件のもとでの創造力、模倣、圧力などの諸要因が関係していることは言うまでもない。なお、普通児群で1名だけ、ずっと白紙のままで描画を拒否する子供がいたので、これは資料から除外することにした。

1 普通児、精薄児の描画発達のパターン

普通児群、精薄児群ともに、各人について、第1回目の絵を基準として、2, 3, 4, 5回目の絵を、それぞれ1回目のものと比較して、変化した箇所を全てとり出した。勿論、1回目の描画が欠席のため欠けている場合は、2回目の絵を基準とした。そして、とり出した項目のうち、小林、小野がグッドイナフに準拠した、人物画の採点項目としてあげている項目、それぞれ1項目が増えるごとに、+1点として採点した。人物画の発達項目が減る場合は-1点とした。被験者の精神年齢が低いので、複雑な発達項目はあまり出現していない。それ故、本研究では、これに加えて、お母さんを描くように指示を与えたし、また、12色クレヨンを用いたので、女性的特徴が表れている項目や、髪の毛

を黒色、顔を肌色、口紅を赤色など、お母さんにふさわしい色彩の変化があった場合も、+1点としてとりあげた。女性的特徴としては、⁽⁶⁾Harrisのあげている女子像の採点項目はあまりみられなかったが、髪の色が女性的になる。服装が女性にふさわしいものになる（スカートをはく）等もまた、+1点としてとりあげた。

本研究の場合、性格的、情緒的な面は、一応別にして、知的な面をとりあげたので、人物像の大小の変化、画用紙上での位置の変化、人物像の傾斜と直立、人数の増減、人物以外の描写、使用した色彩の数の増減、色の寒色、暖色の変化、ぬりつぶし等はとりあげなかった。ただ、ぬりつぶしで、同色の色でぬりつぶしたために、例えば口が描いてあるのがわからなくなった場合は、-1点という風にみなした。また、服をぬりつぶした場合、女性像にふさわしい模様とか色が現れたとき、+1点とした。

以上あげたような方法により、各回ごとの人物画の変化を得点化した。第1回目の絵と比べて発達がみられる場合、得点は+になり、発達が逆行して低下している場合は、得点が-となる。+の得点が大きいほど著しく発達していると考ええる。

普通児（N群）25名、精薄児（F群）6名に対して、各人の1回目の絵を基準とした、以後4回の各々の絵の変化を、折れ線グラフで図示したのが図1である。

図1の31のグラフから発達のパターンを次のように分類した。

a型 漸次発達が著しい（例、N₈、付録1参照）

1回目の描画に比べ、回を増すごとに発達項目数が著しく増加する。

b型 少しずつ発達する（例、N₄）

a型ほど発達項目数が増えない。

c型 むらがあるが発達する（例、N₉）

1回目には比べると全体として発達がみられるが、3回目が2回目より発達が逆行したりすることがある。

d型 あまり発達しない（例、N₂₄）

e型 発達が逆行する（例、N₁₈、付録2参照）

発達項目に相当するものが減少する。

パターン、a、b、cは発達していると考ええる。

各被験者の発達パターンの型は図1に示してあるが、これを普通児群、精薄児群にわけて表示したのが表1である。

表1より、普通児の約7割は発達しているのに比べ、精薄児では6名中1名しか発達がみられなかった。a+b+c型の発達する型と、d+eの発達しない型について、普通児群と精薄児群との間で χ^2 -検定を行った結果5%以下の有意差がみられた。

精薄児群で発達がみられたF₄（自閉傾向）は1、2回とも、なぐり描きしか出来ず、絵を描くことをいやがっていた。しかし、3回目から描画に集中するようになり、4回目には人物を円で表わすようになり、5回目には人間の顔が文字のようななぐり描きの中に描かれるようになった。（付録4参照）パターン、b、cの5名の精薄児はあまり発達がみられず、5回にわたって似かよった型にはまった絵をくり返し描いていて変化は少なかった。それに比べ、普通児のd、eパターンの子供は、発達はみられないが、毎回変化のある絵を描いている。

全体的にみて、普通児の描画活動は、短い期

表1 普通児と精薄児における
発達パターンの比較

対象児 発達 パターン	普 通 児	精 薄 児	計
a	5		5
b	7	1	8
c	5		5
d	4	4	8
e	4	1	5
白 紙	1		1
計	26	6	32

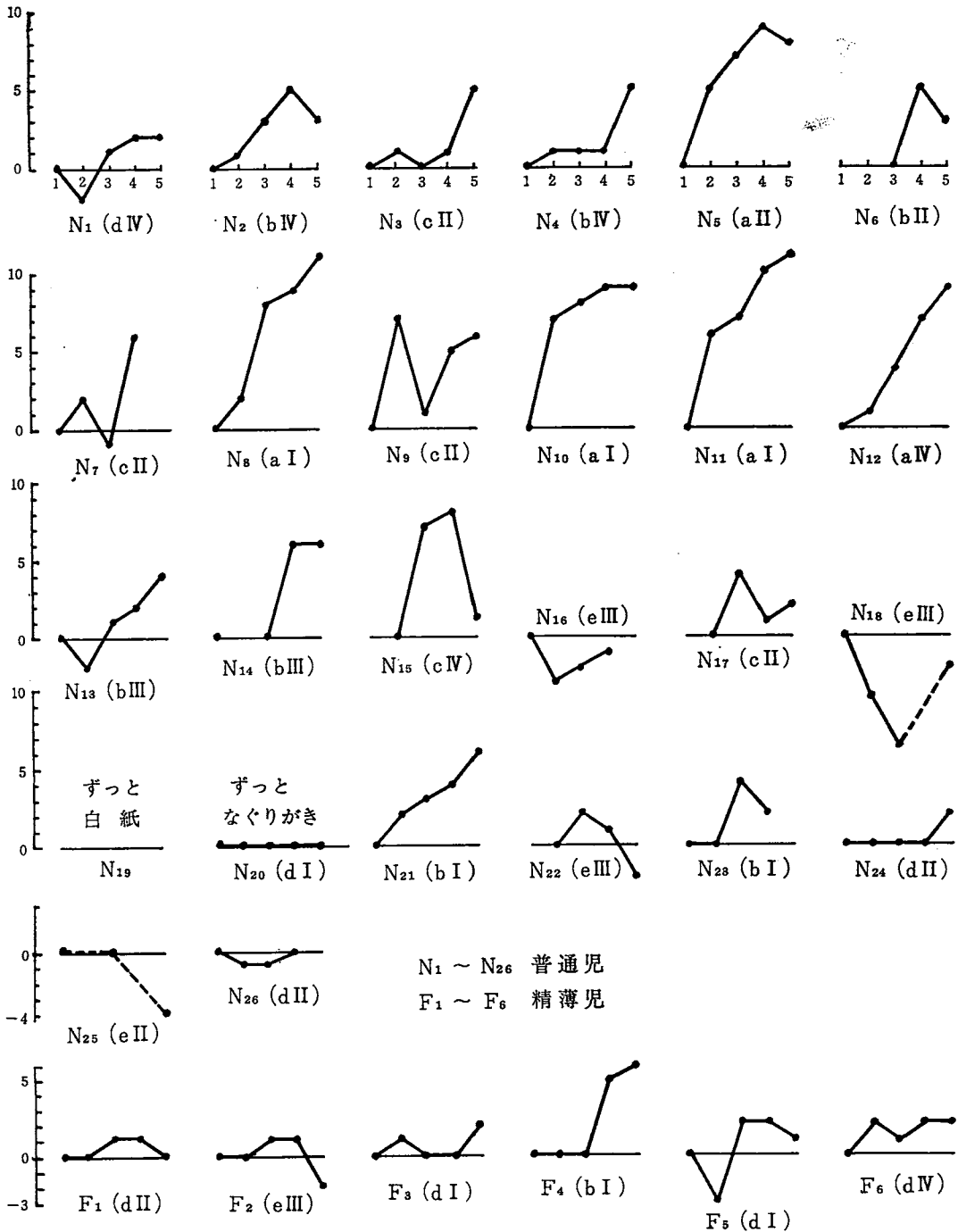


図1 普通児と精薄児における1回目を基準とした人物描画の変化

間中にも徐々に変化発達しているのに比べ、精薄児の方は発達が停滞して描画の内容が固執的であるといえよう。(付録3参照)。

2 発達段階別にみた発達パターン

結果1での発達パターンa～eは、基準にした第1回目の描画状態が各々異っていた。そこで、1回目の描画状態が発達段階的にみて、どの段階にあるものがより発達し易く、どの段階にあるものが発達し難いかを調べるために、基準となる1回目の人物画の発達段階を次の4つの段階に分類し、その発達段階と発達パターンとの関係をみていくことにする。発達段階として

I 段階 なぐり描き～象徴的表現

曲線、円、点などのなぐり描き

顔らしきもの、目、口が漠然とみられる

II 段階 頭部中心の頭足人間で、顔が完成している。

顔から腕や脚が出ている。顔の輪郭、目、口、鼻は明瞭にみられる。

III 段階 胴が描かれるが、頭部中心である。

胴が描かれるが、頭部が胴に比して、アンバランスに大きい。また、腕が頭から出ている。

IV 段階 胴から腕、脚が出て、全体的に人間らしくなる。

胴と頭部とのバランスがよくなり、身体部位をほぼ完全に描いている。

各被験者の基準となる1回目の絵を、以上のI～IVの4つの段階に分類したものは、図1に示してあるが、発達段階別にみた発達パターンを示したのが表2である。

表2より普通児では、始めの発達段階が、I 段階(なぐり描き～象徴的表現)、IV 段階(胴から腕、脚が出る)のものは発達し易く、III 段階(胴が描かれるが頭部中心)のものは発達が不安定であるといえる。このことから、人物画の発達に於て、「象徴的表現」から「頭足人間」への発達、「胴が出来、腕と脚の位置が正しい」から「完全人」への発達は、わりあい抵抗なくスムーズに行われることがわかる。つま

表2 発達段階別にみた発達パターン

発達パターン			a	b	c	d	e	計
発達段階								
I	普 精	通 薄	児 児	3	2 1		1 2	6 3
II	普 精	通 薄	児 児	1	1	4	2 1	9 1
III	普 精	通 薄	児 児		2		3 1	5 1
IV	普 精	通 薄	児 児	1	2	1	1 1	5 1
計	普 精	通 薄	児 児	5	7 1	5	4 4 1	25 6

り象徴的表現が出来て、顔のだいたいの様子が臚げながら解ってくると、頭足画への移行はた易く行われる。また、頭部中心の頭でっかちの人間像に対し疑問を感じ、胴と頭部のバランスが理解され、とくに腕の出る位置が頭部からでなく胴体から出ていることが解ると、完全な人間像への描画の移行がた易く行われるものと思われる。

それに比べて「頭部中心で腕が頭から出ている」III 段階から、「胴体と頭部のバランスがよくなり、腕が胴体から出る」IV 段階への発達は、遅く不安定である(5人のうち3人までがe型である)。発達の遅い不安定なこの過程は、子供にとって、単に人間に頭、胴、腕、脚があるということを知っていることから、実際に人間をみて、人間の身体の形態を知り、現実的に修正するという、新しい過程だと考えられる。単に知っていることと、見えることとの違いを理解し、人間らしく描こうとの努力がなされ、いろんな試行錯誤が行われる過程ではないかと思う。つまり子供にとっては、主観性と客観性の混乱の中に於て、徐々に発達していく過程である。

ところで、精薄児は、始めの段階でI 段階という発達し易い段階にあるにもかかわらず、変化発達し難い。II 段階の1名も型にはまった似かよった絵を描き続け、変化がみられない。それに比べて普通児のIII 段階のものは、発達はしなないが描画の変化の様子から発達への努力は伺

われる。精薄児が型にはまった固執的な絵を描くのは、心的構造の「硬さ」(レヴィン等による)のためであるとも考えられる。

普通児は、とくに指導がなされなくとも、数多く描くことや模倣により、新しいものを獲得していく。つまり、描く機会と準拠する集団が与えられれば、ある程度自らの力で発達出来るものと考えられる。他方、精薄児では、心的構造の「硬さ」のために新しいものを獲得していくということが非常に困難であり、それだけ発達し難いということになる。しかし、ここで対象とした精薄児がこれ以上発達し難いということではなく、長期的に見れば、普通児と同様の発達の道程を進んでいくものと思われる。そこで、新しいものを獲得し、次の段階へ進むための援助が必要である。とりわけ、Ⅰ段階のものには、実際の自らの、或は他者の、目、鼻、口などの身体部位に着目させ、そこから顔のイメージを認識出来るような、身体的 (physical) なアプローチを伴う援助が必要であろうし、Ⅱ、Ⅲ段階のものには、知っていることと、見えるものとの差異に気づかせるような、現実性の感覚を喚起させるようなアプローチを伴う援助が必要であろうと思われる。

3 普通児群における、発達パターンと知能指数、生活年令との関係

普通児 (幼児) に於ける人物画の描画発達の特徴を調べるために、普通児25名についての知能指数と発達パターンとの関係を表したのが表3である。

被験者の数が少ないので明確には言えないが、高知能群にはaパターンの発達の著しい者が多く、低知能群にはdパターンの発達の停滞した者や、eパターンの発達の低下した者が多いことがわかる。IQ 111以上の高知能群とIQ 110以下の低知能群について、 $a+b+c$ の発達するパターンと、 $d+e$ の発達しないパターンの χ^2 -検定を行った結果、有意差はみられなかった。

次に、生活年令と発達パターンとの関係を見たのが表4である。

表3 普通児におけるI.Q.別にみた発達パターン

発達パターン I.Q.	a	b	c	d	e	計
131 ~ 140					1	1
121 ~ 130	2	3	1	1		7
111 ~ 120	2	1	3		1	7
101 ~ 110	1	3	1	2	2	9
91 ~ 100						
81 ~ 90				1		1
計	5	7	5	4	4	25

表4 普通児におけるC.A.別にみた発達パターン

発達パターン C.A.	a	b	c	d	e	計
4:7 ~ 4:5	1	3	1	1		6
4:4 ~ 4:2	4	2	2			8
4:1 ~ 4:0			2	1	2	5
3:11 ~ 3:9		2		2	2	6
計	5	7	5	4	4	25

表4より、生活年令が4才2ヶ月以上では、大部分がa, b, cのパターンで発達がみられるが、生活年令4才1ヶ月以下では、d, eパターンが多く発達が停滞している。生活年令で4才2ヶ月以上と、4才1ヶ月以下の2群にわけて、 $a+b+c$ の発達するパターンと $d+e$ の発達しないパターンについて χ^2 -検定を行った結果、1%以下の有意差がみられた。

この結果から、3才台では発達が著しくないが、4才になると人物画での発達が著しくなり、4才から5才の間に、頭足画の時期をはさんで、急速に人物像を描けるようになると考えられる。

さらに、精神年令 (M. A.) と発達パターンとの関係をみたのが表5である。表5より、M. A. 5才以上では圧倒的にa, b, cの発達するパターンが多く、M. A. 4才11ヶ月以下では、d, eの発達しないパターンが約半数近

くいる。M. A. 5才以上と M. A. 4才11ヶ月以下の2群にわけ、 $a + b + c$ の発達するパターンと、 $d + e$ の発達しないパターンについての χ^2 -検定の結果は有意ではなかった。しかし傾向としては、M. A. 5才以上になると、人物描画に於て非常に発達するといえる。そして、コピッツが知能検査としての人物画の有効性を5才以上と限定したことも納得できる。

表5 普通児におけるM. A. と発達パターンとの関係

M. A. \ 発達パターン	a	b	c	d	e	計
M. A. 5才以上	4	3	3	1	1	12
M. A. 4才11ヶ月以下	1	4	2	3	3	13
計	5	7	5	4	4	25

本研究の被験者として、3才台、4才台の幼児を選び、それに相応するていどの精薄児を対応させたが、実際に田中ビネを実施して精神年令を測定した結果では、普通児群は、平均5才ぐらいの精神年令があり、精薄児群は、予想よりずっと低かったので、両群の精神年令の差が2才以上もある結果となった。精薄児群での発達しないことの要因として、普通児群と比べてこの精神年令の低さを考慮せねばならない。しかしまた、精薄児群にみられる、型にはまった絵のくり返しは、単に精神年令のみでは片づけられないで、心的構造の「硬さ」がその要因として大きな比重を占めているようである。この心的構造の「硬さ」は知能指数と多に関係しているから、精薄児群の被験者を、養護学校よりも、特殊学級あたりに求めた方がよかったかもしれない。

4 本研究の問題点として考えられるのは、前述した、普通児群の精神年令が、精薄児群の精神年令よりかなり高いことが、まず第一の問題点である。また、描画の知的な面のみをとりあげて、情緒的な面をとりあげなかったことも考慮すべきである。幼児の描画は、その時の気

分や情緒の状態により、また、周りの子供の絵が気になったりすることで影響を受けることがあると思える。停滞したり、逆行している子供の場合、一時的な情緒の問題がからんでいるとしたら、そうした要因を除外して、単に知的な面のみをとりあげてよいかどうか問題である。

また、発達項目をすべて1点と評価しているが、発達項目の一つ一つが同じ比重をもつとは考えられない面もある。ある発達項目を描くには、知的に非常な努力がいるが、別の発達項目では、それほど知的能力の発達はいらないうちかもしれない。例えば、手が描かれる1点と、胴が描かれる1点と、腕が頭から出ていたのが胴から出るようになる1点とでは、比重が異なるように思える。色彩も考慮に入れて、髪の毛を黒色にぬったのに対し1点を与えたことなどは、偶然（確率12分の1）黒色を用いた場合も考えられる。

期間が短い割には、普通児の場合、驚くほど変化がみられるが、望ましくいえば、もっと長期間に渡って1年間ぐらい続けてみれば、さらに種々のことが解明したかもしれない。

また、一般に、人物画検査では、グッドイナフの「男の人」を描くように、コピッツでは「ただ一人の人間」を描くように、教示を与えるが、本研究では、「お母さん」を描くように指示した。被験者が幼児であるだけに、この場合は、「お母さん」の方がより身近なものとして描き易かったのではないかと思える。

精神薄弱児の人物画が普通児ほど発達しなくて、固執が強く、型にはまった絵を描き続ける、いわゆる固執性の問題は、従来から、レヴィンやクーニン等により、知的な遅滞に特有の現象としてとらえられている。しかし、こうした特性は、精薄児が本質的にもつものとはばかりは言えないで、次のような面も考えられる。

多田が高岡市の児童相談の場面で観察してきた、精薄幼児の親子関係のあり方などをふりかえってみると、精薄幼児の絵の描き方とそれへの母親の係り方が固執的な絵を描かせる重要な

要因になっていると考えられる面がある。それは、母親が自分の子が障害児だと、ちえ遅れだと受容するのが最もむづかしい時期が、幼稚園なり、保育園へ入所する前の、ちょうど2～4才の頃なのである。つまり、どこか周囲の子供より遅れているように、うすうす感じているが、何とかそれを否定して、そうじゃないと思ひこみたい必死の防衛の姿勢がみられる時期、言うなれば、母親にとって最もつらい苦悩の時期なのである。そこで、母親は、何とか人並の絵を描かせようとあせり、なぐり描きの過程を充分に経験させないで、いきなり、顔らしきものを何とか描かせようとそのみを教えこみ、それが描けるとなると内心非常に安心するという事態である。このあせりの故に、基本的になぐり描きの過程を経ずして、いきなり精薄幼児にとっては難しい、一つのパターンの絵を強制されるわけであり、また、それらしく描けると、母親から非常に誉められるということになる。つまり、本来なら精神年齢の上からみて、まだ絵にならない、なぐり描きの時期にあり、子供は、なぐり描きの手の運動を楽しむ時期かもしれないのに、強制され、能力以上のことを要求されることにより、一つのパターンの絵しか描けないことになってくる、また、その絵が描けさえすれば、母親から承認されるので、ますますそのパターンの絵しか描かないという⁽¹⁴⁾ことになり易い。なぐり描きの重要性は、園田も述べているように、「絵の範ちゅうにはいらなければならないけれども、この活動があつてはじめて、絵画的創造活動への領域へ入りこむことが出来る」ということである。また、3～4才の時期について、「本来能動的であるべきこの時期に、同じ形式の絵ばかり描くことが続く子がいるとすれば、きつとまわりから口やかましく世話をやかれたために劣等感や依頼心をもってしまい、主体的な意欲に支えられた認識をもてず、新しい心象も生まれず、安易な表現形式に逃避してしまっているだろう」と述べている。

精神薄弱児の幼児教育の難しさは、この本来主体的であるべき時期に、母親のあせりのた

め、過度に強制的にいろんなことをやらせたり口やかましく言ったり、また、母親の心理状態の悪化のため、必要な働きかけが欠けてしまうことである。多田⁽¹⁵⁾が行った、ロールシャッハテストの結果に於て、従来、精薄児に多いとされていたC反応が非常に少なかった点も、子供が本来もっている、生々しい環境への反応性を、周囲の人達のあせりにより、強制しすぎた嫉妬などのために、無くしてしまったことがその要因として考えられる。一方では、この時期の母親に対して、少ない援助しか与える機会のないこと、母親もまた、援助を拒むことがしばしばみられることが、精薄幼児の後々の発達のためには不幸なことだと思われる。

参 考 文 献

- ① Grözinger, W. : Kinder kritzeln, zeichnen, malen, Prestel-Verlag, 1961, 鬼丸吉弘訳：なぐり描きの発達過程, 黎明書房, 1970
- ② 伊藤忍, 若林慎一郎：3才児健康診査についての研究(その3)——人物描画と精神発達——, 児童精神医学とその近接領域, Vol. 7, No. 4, 30—43, 1966
- ③ Kellogg, R. : Analyzing Children's Art, Mayfield Publishing Company, 1969.
- ④ 木船憲幸：精神薄弱児の人物画知能検査の併存的妥当性に関する研究——田中ビネー知能検査を基準として——, 特殊教育研究, Vol. 17, No. 3, 50—54, 1980
- ⑤ 小林重雄：人物画による発達検査の検討, 山形大学紀要, 教育科学編, Vol. 4, No. 2, 81—101, 1967
- ⑥ 小林重雄：DAM グッドイナフ 人物画知能検査ハンドブック, 三京房, 1977
- ⑦ 小林重雄, 小野敬仁：人物画検査の検討(3)——男女差について——, 日本心理学会第40回大会論文集, 1109—1110, 1976
- ⑧ Koppitz, E. M. : Psychological Evaluation of Children's Human Figure Drawings, Grune & Stratton Inc, 1968, 古賀行義監訳：子どもの人物画——その心理学的評価——, 建帛社, 1971
- ⑨ 栗岡英之助：幼児画入門, 国土社, 1974
- ⑩ 松田善衛：精神薄弱児の描画能力の実態, 精神薄

弱児研究 179号, 44~56, 1973

- ⑪ McElwee, E. W. : The reliability of the Goodenough Intelligence Test used with subnormal children fourteen years of age, J. Appl. Psychol., 16, 217—218, 1932
- ⑫ McHugh, G. : Changes in Goodenough IQ at the public school kindergarten level, J. educ. Psychol., 36, 17—30, 1945
- ⑬ 関計夫：絵をかく子供の心理，中野佐三編，児童画と性格，1～35，児童心理選書2，金子書房，1957
- ⑭ 園田正治：子どもの絵と大脳のはたらき，黎明書房，1976
- ⑮ 多田建治：精神薄弱児のロールシャッハ反応(Ⅱ)——反応数，その他に関して——，金沢大学教育学部教科教育研究，第14号，17—30，1980
- ⑯ Vane, J. R. & Kessler, R. T. : The Goodenough Draw-A-Man Test : Long term reliability and validity, J. clin. Psychol., 20, 487—488, 1964

付録1 例 普通児N₈，短期間の間に典型的に急速に発達した例

- 10/29 なぐり描き
- 11/13 顔らしきものがみられる
- 11/27 マンダラ風頭足人，目，鼻，口，腕，脚がはっきりしている
- 11/27の裏，Sun face の頭足画，目，鼻，口がより一層はっきりして，眉毛がみられる
- 12/11 胴ができるが，頭につけたしたような胴である，色も青色でお母さんらしくない。右方に桃色で小さく描かれたのがお母さんなのか
- 12/17 胴がより人間らしくなり，上下2つの部分にわかれている。全体に桃色を用いて，服の色もお母さんらしくなり，髪の毛が黒色になる。腕の出る位置がまだおかしい

付録2 例 普通児N₁₈ 発達が逆行し，低下した例

- 10/29 腕が頭部から出ていておかしいが，その他はお母さんらしい描き方で，Ⅲ段階の発達を示している
- 11/13 一度描いた顔を，同色系の色で塗りつぶしている。母親との情緒的な問題が伺える
- 11/27 胴体が非常に小さくなり，腕もよくわから

ない，脚がなくなり，逆行を示している。
歯がむき出して攻撃性が伺える

- 12/25 11/27よりは少しよくなり，髪の毛などお母さんらしくなるが，第1回目と比べると発達が低下している

付録3 例 精薄児F₁，ダウン症，固執の強い例
10/18 青色のみ用いた顔の絵

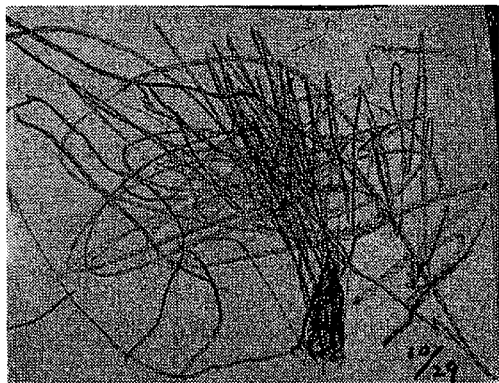
- 11/1 色が茶色に変わり，鼻の形が丸から棒になった以外変化がない
- 11/15 胴が出来るが，顔の描き方など変化がない，色も2回目と同様茶色単色
- 12/1 胴体が丸くふくらむ以外に変化がない
- 12/13 胴体がなくなる，顔の数が増えるが変化は乏しい。色も変化なし

全体を通じて，単色の絵であり，文字らしきものを盛んに書いている。

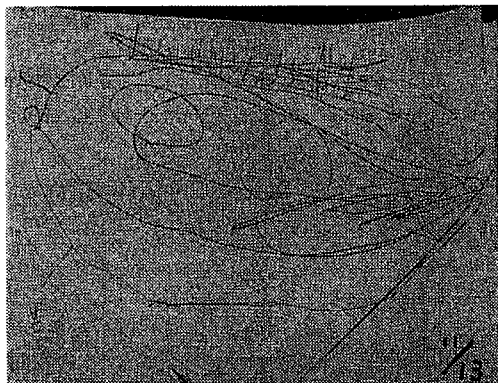
付録4 例 精薄児F₄，自閉傾向，なぐり描きから急に人物の顔が現れた例

- 10/18 ペレットに絵具を出したような，なぐり描き，12色全部用いている
- 11/1 1回目と同じように固執が強い
- 11/15 なぐり描きが丸くなり顔の輪郭に近づいているがまだ顔になっていない。この日から描画に集中するようになる
- 12/1 急に人間の顔が弱いタッチで出現する。なぐり描きが文字らしきものに変化する
- 12/13 弱いタッチの顔が3つほど見え，その上から文字らしきものをなぐり描きのように盛んにかいている

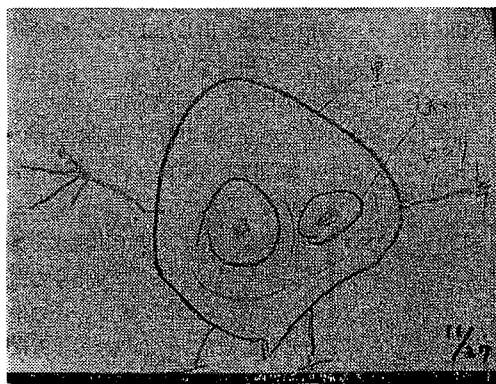
付 録 1 (No.)



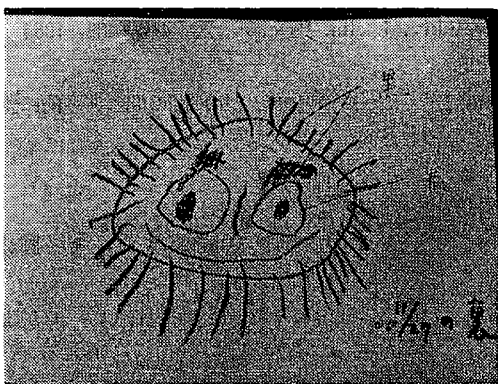
10 月 29 日



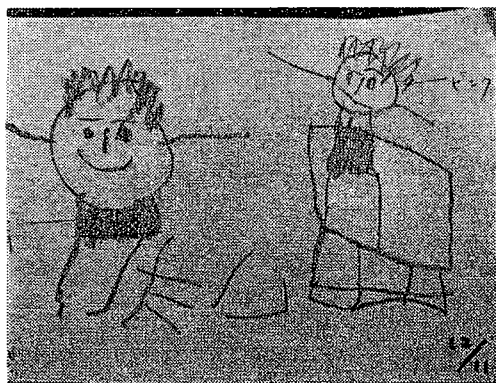
11 月 13 日



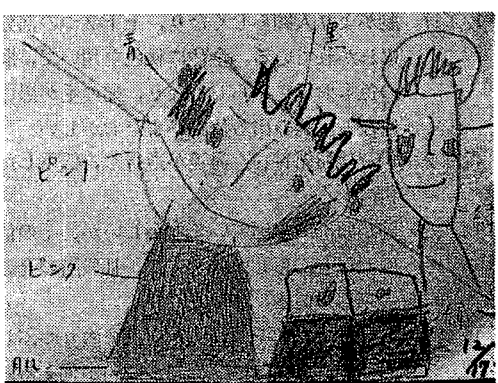
11 月 27 日



11月27日の裏

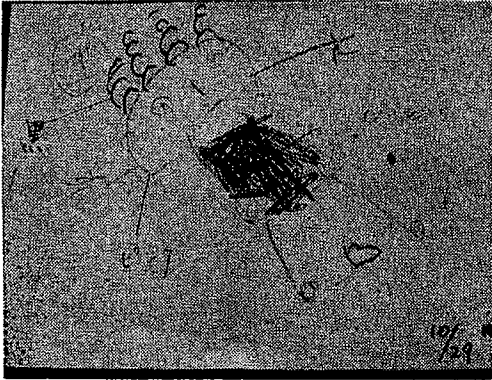


12 月 11 日

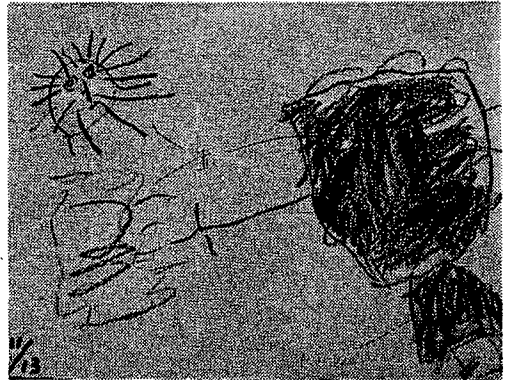


12 月 17 日

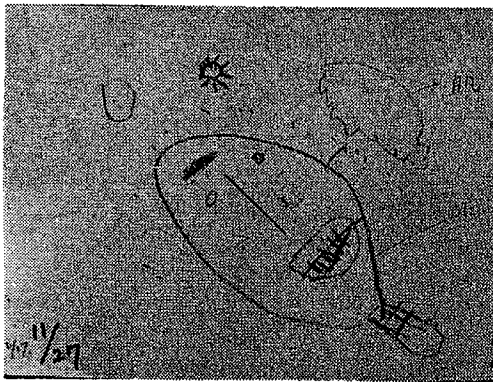
付 録 2 (N18)



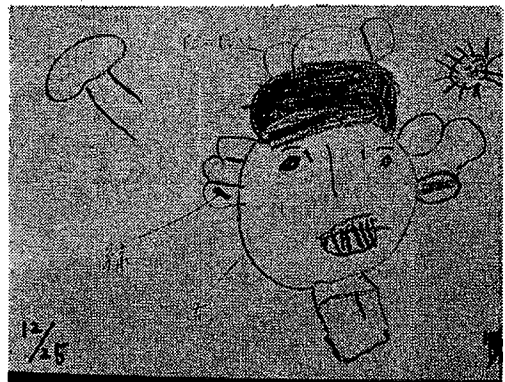
10 月 29 日



11 月 13 日

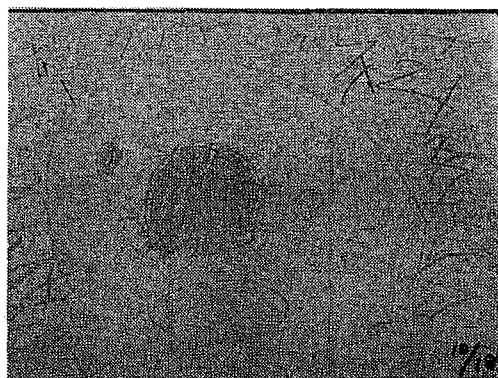


11 月 27 日

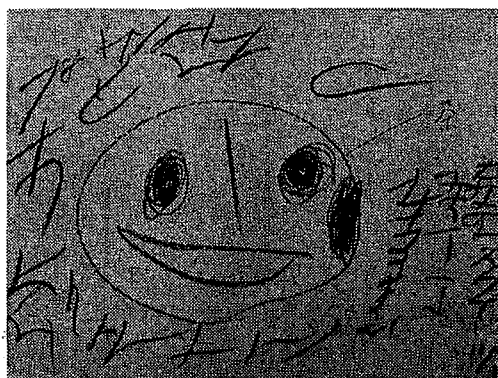


12 月 25 日

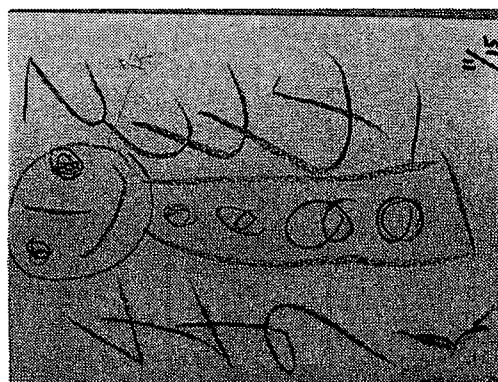
付 録 3 (F)



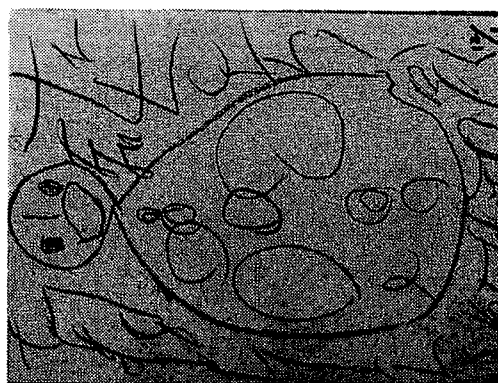
10 月 18 日



11 月 1 日



11 月 15 日

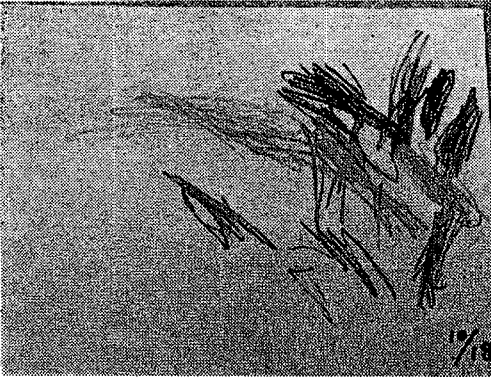


12 月 1 日

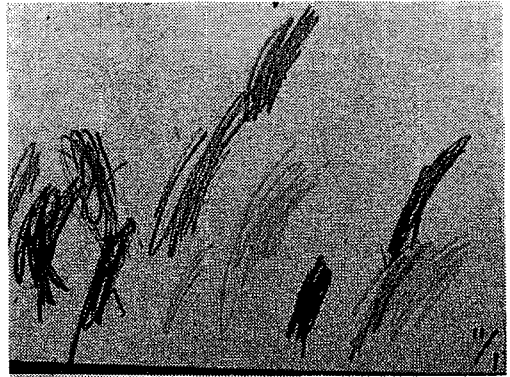


12 月 13 日

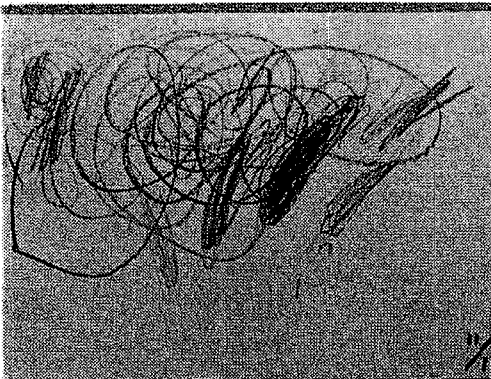
付 録 4 (F.)



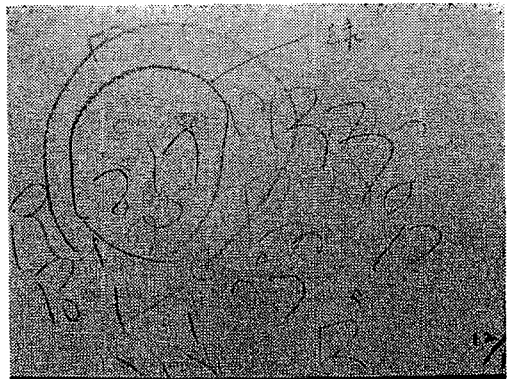
10 月 18 日



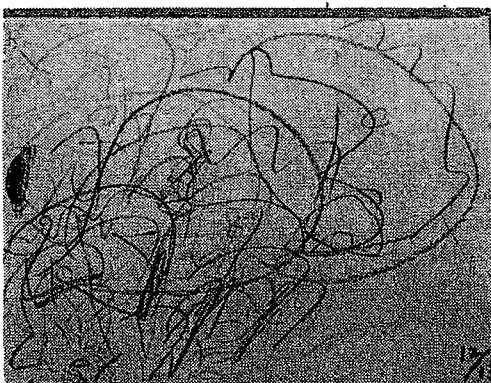
11 月 1 日



11 月 15 日



12 月 1 日



12 月 13 日